

12/28 朝日

# 「助けて」触れて伝えたい

## コロナ禍孤立深める盲ろう者

共生のSDGs  
明日もこの星で

1

目を覚まし、暗闇と静寂のなかで時計の針に触れ、時間を確かめる。手探りで窓を開け、冷たい風と暖かい光を肌で感じ取る。廊下から伝わる小さな振動が、みんなも動き出したことを教えてくれる。



光も音もない世界で生きる、盲ろう者の加賀明音さん。その手の感覚は人とつながる大切なコミュニケーションの手段だ。11月22日、大阪市内、藤山卓弥撮影

「助けて」。孤独と不安が押し寄せる。加賀さんは生まれつき目が見えず、10代の終わりから徐々に耳も聞こえなくなってきた。「自分の世界を広げたい」という思いから、盲ろう者と共同生活を始めた。

他者と話す手段は「触れること」。共同生活にあたって、「指文字」や「触手話」といった意思疎通を図る方法を学んだ。グループホーム「ミッキーハウス」では自分でできることを増やそうと、職員らの手を借りて、手芸などの就労訓練に取り組んでいる。

使って世の中の動きを追うと、オンラインで交流が広がっていることを知った。一つのイベントが気になった。まちづくりなどに取り組む市民団体「野毛坂ローカル」（横浜市が、5月1日に開いた「新型コロナウイルスで取り残されそうな人」ナドで取り残された「盲ろう者」というテーマのオンライン勉強会だ。盲ろう者なので、文字のやりとりで参加させてもらえませんか。開催前日、勇気を出して代表者にSNSでメッセージを届けると、参加者の発言や会場の雰囲気や文章にして送ってもらえることになった。

7月、加賀さんはグループホームに戻った。世界を広げたい、できることを増やしたい、一歩ずつ踏み出したいという思いは日々強くなる。一度は諦めた大学への進学も、改めて目標に定めた。「いつも普通とは違う扱いで、支援は受ける側。でも私だけじゃなくて、みんなが何か困っている。『普通』ってなんなのか。そんなことを学問を通して考えてみたいです」

**勇気出し動いた**  
だが、新型コロナウイルスの感染リスクを減らすと、4月からしばらく美容院に戻った。一緒に暮らす母は働きに出るため、一日の大半を一人で過ごした。パソコン上の文字情報を点字に変換して浮かび上がりせる「点字ディスプレイ」を

**自然に言えたら**  
自身を振り返った。3歳から習ったピアノや、中学2年生から習い始めてジュニアオーケストラにも所属したフルートは、耳が聞こえなくなり、周りと音を合わせられなくなって諦めざるを得なかった。読書や勉強は大好きだったが、盲学校ではだんだん先生の話を聞き取れなくなり、授業についていけなくなった。

誰かが自然に「助けて」と言い合える社会になれたら。そんな思いをつづった作文は、同団体が「誰ひとり取り残さない」をテーマに募った今夏の小論文コンクールで大賞に選ばれた。

2面に続く

